

“Typhoon”における差異の構造

後藤隆浩

1

Conrad 作品のテキスト全般の特性は何かという問いに対しては、それは語りであるという解答を用意することができるだろう。Conrad のテキストに内在する諸現象の基層には、語りのメカニズムが組み込まれている。このような認識は、Conrad 作品のテキスト分析における一つの命題として受容され得るであろう。実際のところ、この認識を出発点として Conrad 作品の構造が分析されてきたのである。今後もどのような批評理論の影響下において Conrad のテキストが読解されることになろうとも、語りの問題が分析の視界から消えることはないだろう。批評理論が Conrad のテキストにおける語りのメカニズムに作用することにより、テキストの新たな読みの可能性が開かれていくものと思われる¹⁾。

ここで分析の対象作品として“Typhoon”(1902)をとりあげてみるならば、現在の批評的読みの実践レベルにおいても、やはり語りのメカニズムが多層的、多角的な問題系を生み出していると言えるだろう。また“Typhoon”の語りを小説技法という観点から考察してみると、テキスト表層レベルにおいて高い完成度を示している。読者はテキストの読解過程において、Conrad の重層的な語りの手法の効果を十分に受容していくのである。

“Typhoon”のテキストの読解過程において読者の読みの論理を重層化させている要因は、マックワー船長の人物像の設定であると言ってよいだろう。物語内における船長の言動は、他の登場人物達の言動との間に独特な著しい差異を呈しながら、テキスト内に解釈の焦点を生み出しているのである。テキストの語り手は、船長に関する愚直、単純、鈍重といったイメージを読者に繰り返し提示する。船長の人物像を象徴する印象的エピソードが連鎖的に示されることにより、テキスト読解過程の初期段階において、眼前の事実にしかな反応しないという極めて特徴的な心情構造が前景化してくるのである。

しかしながら、物語内において同一人物として一貫性を保っているこの船長が、職務遂行の局面において、ある種的確さ、鋭さをも発揮する。船長の資質の確定値は、どこに位置付けられるのであろうか。テキスト内において船長の人物像は、二重性を帯びた振幅を呈するのである。船長の人物像を追跡する読者の意識は、彼の資質の二重性に反応し、テキスト全体が内包する差異に基づく二重構造を認識することになるだろう。読者は解釈レベルにおいて、船長の言動における戦略性、韜晦性の可能性を考慮に入れながら、船長の二重性、更にはテキスト全体の二重構造を読み解いていくことになる。そしてそのようなテキスト読解行為は、語り手の提示する鈍重な船長というテキスト表層における前提イメージを解体するレベルの読みを繰り返しているのである。“Typhoon”というテキスト全体の二重構造に照応して読者の意識も二重化する方向で読解行為が進行していくものと思われる。一等航海士ジュークスの手紙に示されるように、テキスト内には西洋と東洋の差異という二項対立の図式が組み込まれている。テキスト表層の語りには、マックワー船長の人物像は東洋のイメージと照応するという含意が内在していると考えてよいだろう。

“Typhoon”のテキスト内における物語内容レベルでの時間は、汽船ナン・シャン号の海図室

1) 周知のように近年の Conrad 研究は、ポストコロニアル批評の段階に到達している。ポストコロニアル批評は、いわゆる「政治と文学」という根源的問題を読者に提起している。語りの問題もこの「政治と文学」という問題圏において、語りの主体の位置が厳しく問われているといえよう。

において、マックワー船長が気圧計の下降を確認する時点から流れ始める。物語内における現在の航海に関する語りの出発点において、テキストの語り手は船長の意識構造を次のように説明する。

The fall — taking into account the excellence of the instrument, the time of the year, and the ship's position on the terrestrial globe — was of a nature ominously prophetic; but the red face of the man betrayed no sort of inward disturbance. Omens were as nothing to him, and he was unable to discover the message of a prophecy till the fulfilment had brought it home to his very door.²⁾

引用の前半部分で述べられている気圧の低下に対する語り手の見解は、極めて常識的な判断であるだろう。しかしながら船長の心情的反応は、一般性からの逸脱的傾向を示し、常識性との間に差異を生み出しているのである。そして予言や前兆といったものを察知しないという船長の心的構造は、テキストの語り口においては、船長の気質というレベルに還元され得るように思われる。

テキストの語り手は、テキスト冒頭からこの気圧低下確認の時点まで数頁を費やして、マックワー船長の生い立ち、船長になるまでの経緯、彼の人物像等に関する印象深い情報を読者に伝達する。このような語りによって読者の意識には、船長に関する単純、鈍重、愚直、想像力不足といったイメージが形成されていくのである³⁾。

そもそも若き日のマックワーが船員となることを志したことそれ自体が、一種の謎である。このような動機に関する謎性が、テキスト内におけるマックワーの人物像の二重性の起点であると思われる。テキストの語り手は、次のように説明する。

Yet the uninteresting lives of men so entirely given to the actuality of the bare existence have their mysterious side. It was impossible in Captain MacWhirr's case, for instance, to understand what under heaven could have induced that perfectly satisfactory son of a petty grocer in Belfast to run away to sea. And yet he had done that very thing at the age of fifteen. (p. 4)

このような疑問、驚きといった感覚を基調とする語り手の語り口に導かれて、読者は船長の思考様式に関する謎性という感覚を語り手と共有する。家出の実行により船員としての生活を始めたマックワーから両親へ最初の手紙が届くのは、八ヵ月後のことである⁴⁾。以後彼は折々に両親に手紙を送り続けることになる。中心となる物語内容の導入部において語られるこの手紙のエピソードは、“Typhoon”のテキストの構造において、手紙の技法が重要な機能として組み込まれていることを読者に予告する前奏として位置付けられるだろう。

ここで読者が留意しなければならない叙述は、マックワーの鈍重なイメージを強調する次の語りであろう。

2) Joseph Conrad, “Typhoon,” *The Nigger of the “Narcissus” and Typhoon and Other Stories* (“Collected Edition of the Works of Joseph Conrad”; London: J. M. Dent and Sons, 1950), p. 6.

以下引用はすべてこの版により、本文の括弧内に頁数を示す。具体的箇所へ言及する場合も同様に本文の括弧内に頁数を示す。

3) Conrad の *Lord Jim* においては、優秀な船員ジムの挫折が描かれる。無意識のレベルにおいて精神的弱点を有するジムと、鈍重に見えながらも職務上意外にも思われるほどの有能さを示すマックワーとの比較は、Conrad 作品における対照的船員像として図式化することが可能であろう。

4) 母国ポーランドを離れ、船員生活を経てイギリスの作家となった Conrad の経歴は、一般的に読者の強い関心の対象となる伝記的要素であるだろう。作中においてマックワーが船員となった経緯に関しては、テキスト表層における状況設定の深層に、Conrad 自身の離郷の心情構造のモチーフが、創作上の加工、変容を経て反映されているように思われる。

As it had never occurred to him to leave word behind, he was mourned over for dead till, after eight months, his first letter arrived from Talcahuano. It was short, and contained the statement: “We had very fine weather on our passage out.” But evidently, in the writer's mind, the only important intelligence was to the effect that his captain had, on the very day of writing, entered him regularly on the ship's articles as Ordinary Seaman. “Because I can do the work,” he explained. (p. 5)

この叙述で語り手が、直接および間接に引用して読者に伝達しているマックワールの言葉は、手紙文の言説であるにもかかわらず、モノローグの感覚に基づいて記述されているといえよう。手紙文の全体がテキスト化されてはいないが、そこには、読み手である両親のぜひとも知りたい内容が全く書かれていないであろうことは、容易に推察できるだろう。このように語り手は、マックワールが鈍重な人物であるという表層的前提に基づいて、読者に情報を伝達しているのである。

しかしながら、例えばマックワールが書き置きをすることを思いつかなかったという言説は、テキストにおける語りの主体性を設定するレベルにおいて、厳密に言えば語り手の判断である。もし家出の実行から手紙の文言に至るまで、マックワールの一連の言動に何らかの意図性が隠されているならば、彼は両親との間のコミュニケーションにおいて形成されるだろう文脈、脈絡といったものを、完全にずらし、脱線させ、無効化していると言えよう。そうであるならば、読者は、語り手の判断を解体し、マックワールの言動における戦略性、韜晦性を読み込むことも、読みの可能性として考える必要があるだろう。

一方父親の方の息子マックワールに対するアンビバレントであったと思われる感情は、息子との文通における文面上のからかうような調子として言語化されたのである。

The mother again wept copiously, while the remark, “Tom's an ass,” expressed the emotions of the father. He was a corpulent man, with a gift for sly chaffing, which to the end of his life he exercised in his intercourse with his son, a little pityingly, as if upon a half-witted person. (p. 5)

このような父親の文面における含意が、マックワール自身に正確に伝わったかどうか、テキスト内の情報としては記述されていない。語り手の認識に従えば、鈍重なマックワールには、父親の憐れみやからかいといった感情の含意は、理解できなかったものと推測される。

マックワールと両親との文通において、マックワールの側から正確に伝達されたことは、ものの名称である。具体的には、多くの船の名、船長の名、船主の名、海の名、大洋の名、海峡の名、岬の名、港の名等である。(pp. 5-6) そして両親は、息子の意中の女性の名も知らされる。しかしながら、マックワールは、このような場合ですら、自己の心情を両親に伝達することはなかったのである。語り手は、次のような説明を加えている。

She was called Lucy. It did not suggest itself to him to mention whether he thought the name pretty. (p. 6)

マックワールから両親への手紙全般について言える傾向であろうが、名詞は伝達されるが心情は伝達されないのである。マックワールの人物像の設定の結果として、このように極端な形で、珍奇な手紙の文面がエピソード化されているのである。ここでより抽象度の高いレベルにおいてマックワールの手紙における言説を観察してみるならば、リスト化、言語分類表といったイメージを抽出することが可能となるだろう。マックワールの言語活動の基層に存在するのは、名詞的言語使用という規制的

枠組みではないかと推測されるのである。

2

“Typhoon” のテキストの物語内容の面白さを生成しているのは、マックワー船長の資質の持つ意外性、二重性である。鈍重と目されている船長が、クーリー達の散乱した貨幣の分配に関して手際のよい公正な処置を講ずる。船長は、鈍重であることと表裏一体、連動した形である種の優秀さを示すのである。船長の人物像は、美質と短所両極の側面を両義的に示していると言えよう。テキストの語り手は、この美質の側面に関しても、小さなエピソードに託しながら読者に伝達する。一等航海士ジュークスは、船長のいつも巻かれていない傘を時々巻いてあげる。そのときの船長の反応は、次のようなものである。

“Oh! aye! The blessed gamp... Thank'ee, Jukes, thank'ee,” would mutter Captain MacWhirr, heartily, without looking up. (p. 4)

マックワー船長の想像力不足という特質は、文脈によっては美質の方向に作用することもあるだろう。語り手はマックワーの船長としての対人関係レベルでの資質を次のように評価する。

It is your imaginative superior who is touchy, overbearing, and difficult to please; but every ship Captain MacWhirr commanded was the floating abode of harmony and peace. (p. 4)

この引用部分において読者は、船が比喩的に住まいと表現されていることに留意する必要があるだろう。物語内の設定として、マックワーにはロンドンに家があり、彼の家族が生活している。陸の家は、彼の書く手紙の届け先である。陸の家と海の家は二重構造は、マックワーおよび彼の家族の意識を多層化し、各自の意識のレベルにおける差異を生成しているのである。

さらに語り手は、マックワーが物語内時間の現在において指揮をとっているナン・シャン号の船長に就任する経緯に関して、重要なエピソードを読者に伝達する。ナン・シャン号は、シヤムのシグ商会の注文によりダンバートンの造船所で建造された汽船である。商会からの信頼できる船長に船を運んでもらいたいという要望を受けて、造船所の年長の方の経営者は迷うことなくマックワーの起用を決定する。造船所の経営者二人はおじと甥の関係にある。

造船所に到着したマックワーに年下の方の経営者が話をするのであるが、それに対してマックワーは鈍い反応しか示さない。マックワーの関心は、話の内容とは全く別のところに向けられる。彼は船室のドアの錠前の調子がよくないことに気がついたのである。

“My uncle wrote of you favourably by yesterday's mail to our good friends — Messrs. Sigg, you know — and doubtless they'll continue you out there in command,” said the junior partner. “You'll be able to boast of being in charge of the handiest boat of her size on the coast of China, Captain,” he added.

“Have you? Thank 'ee,” mumbled vaguely MacWhirr, to whom the view of a distant eventuality could appeal no more than the beauty of a wide landscape to a purblind tourist; and his eyes happening at the moment to be at rest upon the lock of the cabin door, he walked up to it, full of purpose, and began to rattle the handle vigorously, while he observed, in his low, earnest voice, “You can't trust the workmen nowadays. A brand-new lock, and it won't act at all. Stuck fast. See? See?” (p. 8)

マックワーにとっていわゆる世間的な名声といったものは、完全に関心の対象外であるように思われる。彼の精神形態を言語化してみるならば、精度の高い職人氣質と表現することができるだろう。このようなマックワーの態度は、結果的に年下の方の経営者の感情を若干害することになる。

As soon as they found themselves alone in their office across the yard: “You praised that fellow up to Sigg. What is it you see in him?” asked the nephew, with faint contempt.

“I admit he has nothing of your fancy skipper about him, if that's what you mean,” said the elder man, curtly. (pp. 8-9)

年長の方の経営者は、マックワーの人柄、気質についてのすべてを承知して、彼の行う仕事の確実性を信頼し評価しているのである。しかしながら、マックワーの対人関係面における言動は、無骨としか形容できないものである。さらに語り手は、次のようにその後の経緯を説明する。

The lock was replaced accordingly, and a few days afterwards the *Nan-Shan* steamed out to the East, without MacWhirr having offered any further remark as to her fittings, or having been heard to utter a single word hinting at pride in his ship, gratitude for his appointment, or satisfaction at his prospects. (p. 9)

以上の語りにより、マックワーという人物における社会性の特質が明確化するのである。円滑な人間関係という観点から考えると、確かにマックワーの言動様式は、他者との間に摩擦を生じさせかねない要素に満ちていると言えよう。それと同時に、彼の言動様式におけるある種の特質が、職務上の特異な美質ともなり得ているのである。

続けて語り手は、マックワーの精神形態に関して、若干抽象度を上げて、その傾向を分析的に語る。

With a temperament neither loquacious nor taciturn he found very little occasion to talk. There were matters of duty, of course — directions, orders, and so on; but the past being to his mind done with, and the future not there yet, the more general actualities of the day required no comment — because facts can speak for themselves with overwhelming precision. (p. 9)

ここで述べられているのは、マックワーの精神形態における言語意識であり、時間意識であると言えよう。事実と人間の意識との関係性を起点として、一般に人間が話すという行為それ自体の根源的な動機が問い直されているのである。読者は、この語り手の言説に導かれて、マックワーの精神形態を原的レベルにおいて了解する。

読者の意識を物語内容レベルに戻して考えてみると、物語内の事情として、マックワーは彼の気質が船主に好まれて、ナン・シャン号の船長に任命されたことが確認できる。

Old Mr. Sigg liked a man of few words, and one that “you could be sure would not try to improve upon his instructions.” MacWhirr, satisfying these requirements, was continued in command of the *Nan-Shan*, and applied himself to the careful navigation of his ship in the China seas. (p. 9)

マックワーに対する造船所の年長の方の経営者の評価と船主であるシグ老人の評価は、彼の気質の美点を認める考え方の系列に属している。そしてこの系列の延長線上に、マックワー船長のクーリー達に対する公正な処置という評価が位置付けられるのである。

しかしながら、物語内容表層のレベルにおいて、マックワー船長は、基本的に単純、鈍重、愚直な人物として表象されている。読者の意識が物語内容レベルにとどまる限り、マックワー船長の人物像は、両義的、逆説的な存在であり続けるであろう。言語能力の観点において、彼は、言葉のニュアンス、あや、含意、レトリックといったものを容易に理解できない人物として描かれている。ここで読者の思考における抽象度のレベルを上げて考えてみることにしよう。その言語能力に焦点を合わせてマックワー船長の人物像をとらえてみるならば、彼の存在を言語の使用法それ自体の表象として考えることも許され得るであろう。このことが“Typhoon”というテキストを編み変える読みの実践の糸口となり得るものと思われる。

一般に言語の使用法というものは、眼前の事物を指し示す用法から比喩的用法に至るまで、具体から抽象まで多様なレベルに分岐するだろう。マックワー船長が物語内において発する言語の様々な局面は、まさに眼前の事物を指し示すという言語使用の原初的レベルを表象していると言えよう。この“Typhoon”というテキストの読者は、もちろん物語内容それ自体を楽しみ受容するわけであるが、それと同時に高い抽象度の高いレベルにおいて、言語の使用法の論理について考える経験をしているとも言えるのである。

3

一般に時間的遅れ、空間的距離を伴う手紙形式の情報伝達においては、差出人と受取人との間に、様々なレベルでの差異が発生しやすい傾向にあるだろう。“Typhoon”のテキストにおいては、とりわけマックワー船長と彼の妻との間の文通において、著しい差異が生じている。このような差異がテキストの語りに効果的に繰り返されることによって、物語内に状況の対照性、意識の差異性の感覚が生成している。“Typhoon”のテキストの語りの構造は、読者に多層的、複合的世界像への視線を提示しているのである。

“Typhoon”のテキストにおいては、特にマックワー船長および一等航海士ジュークスの書く手紙が重要な構成要素となっている。これらの手紙に関する情報を、テキストの語り手は具体的に読者に提示する。テキスト内における差異性の生成という観点から、二人の書く手紙の機能に焦点を合わせて分析してみよう。テキスト構造論の観点から言えば、物語内容に関するすべての情報を知り得る語り手が設定されているおかげで、読者は手紙に関する情報をすべて受容することができるのである。

本来手紙というものは、差出人と受取人との間の情報伝達における秘密性の保持を基本原理とするものであろう。伝達された情報の第三者への開示、二次的伝達には、当然のことながら時間的遅れを伴うはずである。一般に物語内のレベルにおいても、通常このような手紙の秘密性の原理が、現実世界と同様に保持されるであろう。しかしながら、“Typhoon”の物語内においては、マックワー船長の書く手紙に関しては、差出人側の事情、状況により、秘密性が保持されないのである。

先に確認したようにマックワー船長は、船員となってから両親に手紙を書き続けていた。物語内の現在、彼は妻に手紙を書き続けている。手紙の送り先が両親から妻へと変換し、手紙を書くという行為が反復されている。そして彼の手紙を書くという行為それ自体と彼の手紙の文面は、テキスト表層における彼の鈍重、愚直といったイメージと完全に照応しているのである。彼は、中国の沿岸から年に十二通の手紙を出している。これは、彼の行為におけるある種の規則性、パターン化傾向の側面を示すものと考えてよいだろう。語り手は、彼の書く手紙の文面に関して、次のように説明する。

Captain MacWhirr meantime had gone on the bridge, and into the chart-room, where a letter, commenced two days before, awaited termination. These long letters began with the words, “My darling wife,” and the steward, between the scrubbing of the floors and the dusting of chronometer-boxes, snatched at every opportunity to read them. They interested him much more than they possibly could the woman for whose eye they were intended; and this for the reason that they related in minute detail each successive trip of the *Nan-Shan*.

Her master, faithful to facts, which alone his consciousness reflected, would set them down with painstaking care upon many pages. (p. 14)

専ら事実にはしか関心を示さない精神形態から生み出される言説は、結果的に事実の連鎖以上のものにはならないであろう。この航海に関する事実の記載は、海図室の掃除を担当する給仕の関心の対象となった。書きかけの手紙が数日放置された状態にあることで、給仕が盗み読みすることが可能となる。差出人であるマックワー船長の想定しない経路に情報が流れ、秘密性の保持の原理が破られたのである。

マックワー船長の手紙に関しては、本来の受取人であるマックワー夫人の方にも問題がある。夫人の読み行為の不徹底により、情報伝達が不完全となるのである。何とか台風の暴風雨をきりぬけ、無事入港した後に船長が書いた手紙の核心部分の文面を、夫人は読み落としてしまう。語り手は、手紙を受け取り文面に目を通す夫人の様子を、次のように描写していく。

She reclined in a plush-bottomed and gilt hammock-chair near a tiled fireplace, with Japanese fans on the mantel and a glow of coals in the grate. Lifting her hands, she glanced wearily here and there into the many pages. It was not her fault they were so prosy, so completely uninteresting — from “My darling wife” at the beginning, to “Your loving husband” at the end. She couldn't be really expected to understand all these ship affairs. She was glad, of course, to hear from him, but she had never asked herself why, precisely.

“... They are called typhoons... The mate did not seem to like it... Not in books... Couldn't think of letting it go on...”

The paper rustled sharply. “... A calm that lasted more than twenty minutes,” she read perfunctorily; and the next words her thoughtless eyes caught, on the top of another page, were: “see you and the children again...” She had a movement of impatience. He was always thinking of coming home. He had never had such a good salary before. What was the matter now? (pp. 93-94)

以上の語りは、不徹底な読み行為の実態を精密に描写したのものとして、着目すべき表現であろう。夫人は、手紙の核心部分の文面を正確に読み取らない。彼女は、手紙に雑に目を通していただけなのである。テキストの語りにおいては、夫人の外面的動作および内面的意識の流れが分析的に提示されている。この語りは、不完全な読者の身体的、意識的反応のモデルであるといってもよいだろう。

このようなマックワー夫人の状況に対して、語り手は次のように注釈をつける。

It did not occur to her to turn back overleaf to look. She would have found it recorded there that between 4 and 6 A.M. on December 25th, Captain MacWhirr did actually think that his ship could not possibly live another hour in such a sea, and that

he would never see his wife and children again. Nobody was to know this (his letters got mislaid so quickly) — nobody whatever but the steward, who had been greatly impressed by that disclosure. (p. 94)

給仕による手紙の盗み読みという行為を設定することにより、マックワー船長の手紙の内容情報は、物語内容レベルにおいて、不完全な伝達による消滅という事態が回避されているのである。

手紙の不完全な伝達状況において、読者は船長と夫人との間に存在する意識のレベルでの根本的差異を読み取るであろう。しかしながら、表層的には二人の間にある種の心理的均衡が保たれており、双方とも意識の深層レベルにおける根本的差異の存在には気がついていない様子である。実際のところ二人の現在の生活形態の基層は、二項対立的に構成されている。具体的には海と陸、船と家、東洋（中国沿岸）と西洋（ロンドン）というような対照をなしている。このような対照的要素は、テキスト内における船長、夫人それぞれの言説を見る限り、分析的に意識化、対象化されていないようである。マックワー夫人の生活の基調は、特別な緊張感、緊迫感を伴わない平穏な日常性であるといえよう。ロンドンにおける夫人および子供達の様子を描写する語り手の語り口から読者は、テキスト内で語られる船の状況との対比によって生み出される日常生活のイメージを受け取るであろう。

テキスト終盤の後日談的エピソードの場面において、マックワー夫人は知人女性との立ち話で船長について次のように言及する。

“Thank you very much. He's not coming home yet. Of course it's very sad to have him away, but it's such a comfort to know he keeps so well.” Mrs. MacWhirr drew breath. “The climate there agrees with him,” she added, beamingly, as if poor MacWhirr had been away touring in China for the sake of his health. (pp. 95-96)

すでにテキスト前半部において語り手は、マックワー夫人の心情に関する次のような情報を読者に与えている。

The only secret of her life was her abject terror of the time when her husband would come home to stay for good. (p. 14)

この情報と照らし合わせれば、この場面における夫人の言説の表層レベルにおける含意を読み取ることが容易であるだろう。しかしながら、ここでの夫人の言説の深層レベルを探索してみるならば、読者はそこに、東洋に対する無意識の構造を見いだすであろう。夫人にとって中国沿岸、東洋は、遠く離れた想像上の場所であるだろう。そこでの気候についても、直接体験しているわけではないだろう。無意識のレベルで、例えば遠い場所、東洋という幻想、安楽な土地といったイメージが連鎖すれば、保養地としての東洋という言説も表出され得るだろう。手紙の読解も含めて夫人の一連の言動が無意識的であるからこそ、夫人の認識と船長の実際の状況との差異が、読者の意識におかしの感覚を生成するのだといえよう。この場面において、保養のために中国へ行っているとは気の毒な言われ方だと、マックワー船長に同情的な注釈を語っている語り手は、このおかしみの感覚の生成の構造を自覚しているのである。

物語内において一等航海士ジュークスは、西洋と東洋との間に存在する二項対立的差異性に関して、かなり意識的な人物として設定されている。彼の東洋に対するアンビバレントな感情が、テキスト内に大きな振幅を示しながら表出する。ある時勤務する船ナン・シャン号の船籍が、船主の意向により英国籍からシャム国籍へと変更される。この変更に関してジュークスは、あたかも人格的

侮辱を受けたかのような感覚を抱くのである⁵⁾。(p. 9) このようにジュークスの精神形態には、西洋の東洋に対する優位という無意識的感覚が内在しているといえよう。この感覚はジュークスという個人に特有のものではなく、“Typhoon”の物語世界の背景となる時代に、西洋において一般的に共有されていた感覚であるだろう。しかしながら、西洋に自己の精神の軸足を置いているかに見えるジュークスは、親友との文通における言説で、東洋の美質を前景化していくのである。この親友は、大西洋航路の定期船に勤務する二等航海士である。語り手は、ジュークスの書く手紙の内容について次のように説明する。

First of all he would insist upon the advantages of the Eastern trade, hinting at its superiority to the Western ocean service. He extolled the sky, the seas, the ships, and the easy life of the Far East. The *Nan-Shan*, he affirmed, was second to none as a sea-boat. (pp. 16-17)

ジュークスと同世代、同業の親友を大西洋航路の勤務者として設定することにより、テキスト内に西洋と東洋との比較対照的構造が生成する。そして読者には、東洋西洋双方向への複合的視点が提示されるのである。

テキストの構成要素としてテキスト化されていないが、大西洋航路の親友がジュークスへ送った手紙も、その存在が物語内状況から推定される。ジュークスの手紙における東洋の美質の強調は、おそらく親友の手紙の言説が内包しているだろう西洋の優位という無意識の前提に対する、心理的反応でもありと思われる。台風に遭遇した際に船内で発生したクーリー達の騒乱への適切な対処を報告する手紙において、ジュークスは親友に次のような感想を伝えている。

Oh! It was pretty complete, I can tell you; and you may run to and fro across the Pond to the end of time before you find yourself with such a job on your hands.
(pp. 97-98)

この手紙のジュークスの言説においては、報告されている出来事が東洋特有の経験であると強調されている。さらに一般化すると、東洋における珍しさというイメージが強調されているということになるだろう。ジュークスは、西洋と東洋との間の差異を意識化し、彼自身の価値判断を言説化しているのである。東洋のイメージの言説化において彼は、東洋航路での船員生活という彼自身の実体験を基盤としていることに、留意する必要があるだろう。この点において、ジュークスによる東洋のイメージ化は、無制限な幻想の展開に基づく過剰性への傾斜を回避し得ているものと思われる。

以上本稿においては、“Typhoon”のテキストに内在する差異の構造の諸相について考察してきた。この考察の先には、歴史的な脈においてクーリー達がいかに語られているかという、共同体と他者の関係性の問題が生成してくるだろう。クーリー達という他者の存在は、このテキストに内在する最大の問題である。テキストの語り主体は、どのような原理に基づいて他者を表象していくのであろうか。読者はテキストの批評的読解において、どのような他者の構造を認識するのであろうか。このような問題に関しては、継続課題として稿を改めて考えていくことにする。

5) 船籍の変更、国旗の変更に伴うジュークスの感情の表出とそれに対するマックワー船長の対応を描いた場面は、この作品の解釈の焦点となる重要箇所の一つである。ここでのジュークスの感情は、基層レベルにおいて patriotism に近いものと思われる。彼の精神形態においては、nationalism の段階から patriotism の段階まで、多層的レベルの感覚が複合的状態にあるものと思われる。Conrad は、“Amy Foster”において、原型的な patriotism の問題を描いている。